

博士論文（要約）

論文題目：公営住宅集積地の地域形成・生活展開と移行過程

氏名：西田 芳正

*本論文は刊行が予定されており、差し支えない範囲で論文内容を公表する。

目次

はじめに.....	i
目次.....	iii
1章 「貧困と隣り合って暮らす人々」とその地域.....	1
1節 貧困・排除問題への必要な視点.....	1
2節 貧困・排除の地域的な現れ.....	4
3節 「貧困と隣り合って暮らす人々」とその地域.....	7
4節 対象・テーマ設定と論文構成.....	8
2章 都市流入者の地域形成と大人への移行過程—文化住宅街調査の知見から.....	11
1節 「文化住宅街の青春」調査.....	11
2節 大都市圏拡大期における地域移動と階層.....	12
3節 文化住宅街の形成と流入層.....	15
4節 結ばれ・持ち込まれたネットワーク.....	19
5節 生活の諸相.....	24
6節 教育意識と職業志向.....	29
7節 社会的排除の地域的顕在.....	33
8節 半世紀後の文化住宅街.....	36
3章 問題群としての公営住宅集積地.....	39
1節 文化住宅街調査の限界と課題.....	39
2節 困難層集住地としての公営住宅.....	40
3節 公営住宅集積地調査の概要.....	43
4章 大規模公営住宅団地の地域形成と生活展開—北地域.....	49
1節 「青指の食堂」の風景と地域の概況.....	49
2節 「北団地と自治会の50年をふりかえる」—『50周年記念誌』から.....	50
3節 大規模団地に移り住んだ人々.....	55
4節 地域での生活—親睦と互助、「うちの子ども」という意識.....	57
5節 団地を離れた人々.....	63
6節 団地に残った人々.....	68
7節 地域の現状と課題.....	73
5章 公営住宅を中心とした地域と共同性の展開—西地域.....	79
1節 「盆踊り」の風景と地域の概況.....	79
2節 地域の形成と地域活動の展開.....	79
3節 児童養護施設を支える地域.....	83
4節 子どもを見守る地域.....	93
5節 地域の現状と課題.....	96

6章 公営住宅を中心とした地域の形成と新たな展開—南地域	103
1節 「歳末夜警」の風景と地域の概況	103
2節 地域の形成史—平屋公営住宅から混在地域へ	104
3節 地域活動の創出と継続	107
4節 地域組織・活動の新たな展開	113
5節 地元の世界—愛着・定着・還流	116
6節 地域の現状と課題	120
7章 ヤンチャな子ども・若者と「自然な移り行き」	127
1節 ヤンチャな子ども・若者との出会い	127
2節 ヤンチャな子のふるまいと思い	128
3節 ヤンチャな子のつながり	135
4節 ヤンチャな子と家族	138
5節 ヤンチャな子と学校・教師	140
6節 ヤンチャな子の大人への移行過程	146
7節 ヤンチャな子ども・若者と「自然な移り行き」	154
8章 中学校の「荒れ」からの脱却	157
1節 中学校の「荒れ」	157
2節 「荒れ」のなかでの教師の動きと認識	161
3節 教師の地域・親・子どもの見方	168
4節 生徒指導を通じた「荒れ」からの脱却	171
5節 部活動を通じた「荒れ」からの脱却	174
6節 地域と連携した「荒れ」からの脱却	187
7節 取り組みの成果	189
8節 「荒れ」のない学校であるために	191
終章 知見と課題の整理	195
付章 生活史と参与観察で描く地域と学校の姿	203
文献リスト	213
参考資料	219

文献リスト

- 阿部真大 2009 「ヤンキーたちは地域に戻ることができるのか—労働世界の変化と逸脱集団の社会化」五十嵐太郎編著『ヤンキー文化論序説』河出書房新社
- 荒牧草平 2018 「教育格差の論じ方—趨勢・枠組・メカニズム」日本教育社会学会編『教育社会学のフロンティア 2 変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店
- 新谷周平 2002 「ストリートダンスからフリーターへ—進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71
- バージェス,E.1925=2011 (松本康訳) 「都市の成長—研究プロジェクト序説」松本康編『都市社会学セレクション I 近代アーバンイズム』日本評論社
- バーン,D.2005=2010 (深井秀喜・梶村泰久訳) 『社会的排除とは何か』こぶし書房
- 知念 渉 2018 『〈ヤンチャな子ら〉のエスノグラフィー ヤンキーの生活世界を描き出す』青弓社
- 『大和ハウス工業の50年』編集委員会編 2006 『大和ハウス工業の50年』
- 藤田武志 2001 「中学校部活動の機能に関する社会学的考察—東京都23区の事例を通して」『学校教育研究』16
- ガンズ,H.J.1982=2006 (松本康訳) 『都市の村人たち—イタリア系アメリカ人の階級文化と都市再開発』ハーベスト社
- 浜中重信 1966 『啐啄—小学校長の原体験』文理書院
- ハレーブun,T.K.1982=1990 (正岡寛司監訳) 『家族時間と産業時間』早稲田大学出版部
- 長谷川裕編著 2014 『格差社会における家族の生活・子育て・教育と新たな困難—低所得者集住地域の実態調査から』旬報社
- 平山洋介 2006 『東京の果てに』NTT出版
- 平山洋介 2009 『住宅政策のどこが問題か—〈持家社会〉の次を展望する』光文社
- 本間義人 2004 『戦後住宅政策の検証』信山社
- 本間義人 2009 『居住の貧困』岩波書店
- 保坂 亨 2000 『学校を欠席する子どもたち—長期欠席・不登校から学校教育を考える』東京大学出版会
- 宝月 誠・中野正大編 1997 『シカゴ社会学の研究—初期モノグラフを読む』恒星社厚生閣
- 五十嵐太郎編著 2009 『ヤンキー文化論序説』河出書房新社
- 稲葉佳子 2008 「公営住宅における外国人居住の実態に関する研究」『都市計画論文集』(日本都市計画学会) 43 (1)
- 乾 彰夫編 2006 『18歳の今を生きぬく—高卒1年目の選択』青木書店
- 乾 彰夫編 2013 『高卒5年 どう生き、これからどう生きるのか—若者たちが今〈大人になる〉とは』大月書店
- 磯部 涼 2017 『ルポ 川崎』CYZO

- 亀山佳明 1990『子どもの嘘と秘密』筑摩書房
- 関西計画技術研究所 1984『低質密集住宅の改善策と保健医療計画』
- 加瀬和俊 1997『集団就職の時代—高度成長にない手たち』青木書店
- 加藤弘通 2007『問題行動と学校の荒れ』ナカニシヤ出版
- 加藤弘通・大久保智生 2005「学校の荒れと生徒文化の関係についての研究—〈落ち着いている学校〉と〈荒れている学校〉では生徒文化にどのような違いがあるのか—」『犯罪心理学研究』43 (1)
- 加藤弘通・大久保智生 2009「学校の荒れの収束過程と生徒指導の変化—二者関係から三者関係に基づく指導へ—」『教育心理学研究』57
- 加藤一晃 2018「部活動研究の成果と今後の展望—特別活動、スポーツの場、居場所—」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』65 (1)
- 河上亮一 1999『学校崩壊』草思社
- 河村明和 2016「日本の学校教育の変遷から見た部活動の現状と今後の在り方についての検討」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊 24 (2)
- 川村 光 2009「1970-80年代の学校の「荒れ」を経験した中学校教師のライフヒストリー—教師文化における権威性への注目—」『教育社会学研究』85
- 川村 宏 2014「中学校教師の道徳教育観における荒れの影響—2011年度質問紙調査とインタビュー調査の結果から—」『関西国際大学研究紀要』15
- 川野英二 2013年12月31日「東京オリンピックの前に、都市社会政策と貧困を考える—フランス、アメリカ、大阪から—」『SYNODOS』
(<https://synodos.jp/society/6608/4>)
- 木村治生 2018「データで考える子どもの世界 第1回 部活動の役割を考える」ベネッセ教育総合研究所(<http://berd.benesse.jp/special/datachild/comment01.php> 2019年3月11日参照)
- 北山啓三 2016『未来へ手渡す—大阪 住宅・まちづくり政策史』大阪公立大学共同出版会
- 久富善之編著 1993『豊かさの底辺に生きる—学校システムと弱者の再生産』青木書店
- 倉沢 進編 1986『東京の社会地図』東京大学出版会
- 倉沢 進編 1999『都市空間の比較社会学』放送大学教育振興会
- 松宮 朝 2013「地域から多文化共生を考えることの意味—公営住宅からの視点—」『共生の文化研究』（愛知県立大学多文化共生研究所）8号
- 松本伊智朗・湯澤直美・平湯真人・山野良一・中嶋哲彦編著 2016『子どもの貧困ハンドブック』かもがわ出版
- 松浦善満・中川 崇 1998「子どもの新しい変化（「荒れ」）と教職に関する研究—小中学校の担任教師調査結果から—」『和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要』8
- 耳塚寛明 1985「東京都公立中学校教員の配置状況」『国立教育研究所研究集録』11
- 見田宗介 1973=2008『まなざしの地獄—尽きなく生きることの社会学』河出書房新社

- 宮本常一 1984『忘れられた日本人』岩波書店
- 森千香子 2013「分断される郊外一場の解体と強制されたフレキシビリティ」町村敬志編著『差別と排除の〔いま〕② 都市空間に潜む排除と反抗の力』明石書店
- 森千香子 2016『排除と抵抗の郊外—フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会
- 中澤篤史 2014『運動部活動の戦後と現在—なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか』青弓社
- 西田芳正 1991「大人になる—生徒の目から見た中学生生活」志水宏吉・徳田耕造編『よみがえれ公立中学—尼崎市立「南」中学校のエスノグラフィー』有信堂
- 西田芳正 1994「生徒指導のエスノグラフィー—「教育困難校における「つながる指導」とその背景—」『社会問題研究』43 (2)
- 西田芳正 1996「文化住宅街の青春—低階層集住地域における教育・地位達成」谷富夫編『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社
- 西田芳正 2001a「部落の生活様式—その継承と変化」部落解放・人権研究所編『部落の21家族』解放出版社
- 西田芳正 2001b「解放運動の意図せざる帰結と生活変革の課題」部落解放・人権研究所編『部落の21家族』解放出版社
- 西田芳正 2010「フィールドノートを作成する」谷富夫・山本努編著『よくわかる質的社会調査—プロセス篇』ミネルヴァ書房
- 西田芳正 2011「ライフヒストリー T.K.ハレーブン『家族時間と産業時間』」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス別巻 社会学的思考』世界思想社
- 西田芳正 2012『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会
- 西田芳正 2017「排除型社会の只中で教育の役割を考える」関川芳孝・山中京子・中谷奈津子編『教育福祉学への挑戦』せせらぎ出版
- 西田芳正編著 2011『児童養護施設と社会的排除—家族依存社会の臨界』解放出版社
- 西島 央編著 2006『部活動—その現状とこれからのあり方』学事出版
- 落合恵美子 1993「家族の社会的ネットワークと人口学的世代—60年代と80年代の比較から—」蓮見音彦・奥田道大編『21世紀日本のネオ・コミュニティ』東京大学出版会
- 岡邊 健編 2014『犯罪・非行の社会学—常識をとらえなおす視座』有斐閣
- 岡崎 茂 2018「学校の「荒れ」と生徒指導—中学校での事例分析を通して—」『学校教育実践研究』1巻
- 奥田 均 2002『「人権の宝島」冒険—2000年部落問題調査・10の発見』解放出版社
- 奥田 均 2009『差別のカラクリ』解放出版社
- 大阪・15教職員組合連絡会編 1983『輪切りはごめんだ—仲間を結ぶ進路保障—』現代書館
- 大阪教組過密と教育研究グループ編 1972『過密都市の教育』明治図書
- 大阪府市政改革本部住宅局 2007『大阪府営住宅の事業分析』

- 大阪市 2007『若年者の雇用実態に関する調査報告書』
- 大阪市市民局 2018『国勢調査を活用した実態把握 報告書』
- 大阪府府民文化部人権局 2014『国勢調査を活用した実態把握 報告書【第一次】』
- 朴 賢晶・尾関美喜・中島 誠・吉澤寛之・原田知佳・吉田俊和 2012「地域社会が中学生の問題行動に及ぼす影響—規範意識の低下が引き起こす学校の荒れに着目した検討—」『犯罪心理学研究』49 (2)
- パットナム,R.D.2015=2017(柴内康文訳)『われらの子ども—米国における機会格差の拡大』創元社
- 佐藤郁哉 1984『暴走族のエスノグラフィー—モードの叛乱と文化の呪縛』新曜社
- 佐藤郁哉 1985『ヤンキー・暴走族・社会人—逸脱的ライフスタイルの自然史』新曜社
- 佐藤(粒来) 香 2004『社会移動の歴史社会学—生業／職業／学校』東洋館出版社
- 柴野昌山 1990『現代の青少年—自立とネットワークの技法』学文社
- 志水宏吉 2014『「つながり格差」が学力格差を生む』亜紀書房
- 促進教育研究会編 1967『底辺児を救う 促進教育 《運営と実践》』文理書院
- 園部雅久 2008『都市計画と都市社会学』上智大学出版
- 杉原薫・玉井金吾編 1996『大正・大阪・スラム—もうひとつの日本近代史 【増補版】』新評論
- 園田真理子 2006「住宅政策と福祉政策の統合的な展開に向けて」『住宅』2006年2月号
- 多賀 優・松浦義満 2016「中学校の「荒れ」における「周辺生徒」の役割に関する研究—「荒れ」を経験した大学生の振返りの自己評価から—」『龍谷教職ジャーナル』4号
- 竹中英紀 1992「団地コミュニティを計画する—ニュータウンにおける住宅階層と生活様式」金子勇・園部雅久編『都市社会学のフロンティア3 変動・居住・計画』日本評論社
- 玉野和志・浅川達人編 2009『東京大都市圏の空間形成とコミュニティ』古今書院
- 玉野和志 2005『東京のローカル・コミュニティ—ある町の物語 1900-80』東京大学出版会
- 徳田 剛 2010「「大阪市地域振興会・大阪市赤十字奉仕団」の成立過程」『評論・社会科学』(同志社大学社会学会) 92号
- 妻木進吾 2008「GIS を利用した京阪神大都市圏の圏域構成変化—1980年から2000年へ—」浅野慎一・岩崎信彦・西村雄郎編『京阪神都市圏の重層的なりたち—ユニバーサル・ナショナル・ローカル』昭和堂
- 高木恒一 2012『都市住宅政策と社会—空間構造 東京圏を事例として』立教大学出版会
- 竹中英紀 1992「インナーエリアにおける社会移動と地域形成」高橋勇悦編『大都市社会のリスラクチャリング—東京のインナーシティ問題』日本評論社
- 内田利広・樋口 肇 2005「“荒れ”の【原因】・【経過】・【終息】プロセス」『京都教育大学紀要』107
- 上杉昌也・矢野桂司 2018「ジオデモグラフィクスを用いた教育水準の学校間格差の評価—大阪市を事例として—」『人文地理』70(2)

- 内田 良 2017『ブラック部活動—子どもと先生の苦しみに向き合う』東洋館出版社
- ヴェンカテッシュ,S.2008=2009 (望月衛訳)『ヤバい社会学—一日だけのギャング・リーダー』東京経済新報社
- ウィリス,P.1977=1985 (熊沢誠・山田潤訳)『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗・労働への順応』筑摩書房
- ウィルソン,W.1987=1999 (青木秀男監訳・平川茂・牛草英晴訳)『アメリカのアンダークラス—本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店
- ワース,L.1938=2011 (松本康訳)「生活様式としてのアーバニズム」松本康編『都市社会学セレクションI 近代アーバニズム』日本評論社
- 山本勇次 1998「長崎県高島の炭鉱離職者の「貧困のエートス」と、その変容」江口信清編『「貧困の文化」再考』有斐閣
- 安川禎亮 1997「非行の要因について—中学校教育現場からの再考察—」『犯罪心理学研究』35 (2)
- 安河内恵子 1992「関係のなかに生きる都市人」森岡清志・松本康編『都市社会学のフロンティア2 生活・関係・文化』日本評論社
- 吉田 順 2013『荒れには必ずルールがある—間違った生徒指導が荒れる学校をつくる』学事出版
- 吉田 順 2016『その手抜きが荒れをまねく—落ち着いているときにしておく生徒指導』学事出版
- 吉原直樹 1989「大阪における日本赤十字奉仕団成立の一齣」岩崎信彦・鯨坂学・上田惟一・高木正朗・広原盛明・吉原直樹編『町内会の研究』お茶の水書房
- 由井義通 1998「大阪市における公営住宅居住者の年齢別人口構成の変化」『人文地理』50 (1)
- Bauder,H.,2002,Neighbourhood Effects and Cultural Exclusion, *Urban Studies*,39(1)
- Elliott,D.S.,Menard,S.,Rankin,B.,Elliott,A.,Wilson,W.J.&Huizinga,D.,2006, *Good Kids from Bad Neighborhoods-Successful Development in Social Context*,Cambridge University press
- vanHam,M.,Manley,D.,Bailey,N.,Simpson,L.&MacLennan,D.eds,2013, *Understanding Neighbourhood Dynamics-New Insights for Neighbourhood Effects Research*,Springer
- Wilson, W.J.,2009, *More Than Just Race Being Black and Poor in the Inner City*,Norton

論文要旨

貧困は地域的に集中して現れる、つまり、特定地域に貧困層が集住する傾向が見られる。そこで営まれている生活と子どもから大人への移行過程の具体像を捉えることが、貧困対策、有効な支援策を考える上で不可欠であるが、貧困層が多い地域は生活水準・生活空間両面で貧困層と隣り合って暮らす人々が生活する場ともなっている。そこで本論文では、貧困状況にある人々と「隣り合う」人々がともに生活する地域に焦点を当て、地域が形成される過程にまでさかのぼり、地域でいかなる生活が営まれ、そこで育つ子どもがどのような経験を経て大人の生活に至るのか、つまり、地域形成、生活展開と移行過程を明らかにすることを課題とする。

本論文の構成は以下の通りである。上記した課題を1章で設定した後、同様の課題を追求した95年の調査をもとにした論文を2章とし、3章ではそこで残された課題を踏まえ新たに調査すべき地域として公営住宅集積地を設定した。続く4、5、6章で3つの地域を対象とした調査の結果を示し、さらに当該地域での移行過程の典型例として問題行動を学校内外で繰り返す「ヤンチャ」な子ども・若者に注目しその特徴を7章で、中学校で生起する「荒れ」が収束するまでの過程を8章で描いた。終章で知見と課題を整理し、付章として生活史と観察を組み合わせた調査手法について述べている。

以下、1章を除く各章の概要を記す。

2章では、関西で「文化住宅」と呼ばれる木造賃貸住宅が集積した地域に移り住んだ階層的背景の低い人々が、近隣と親族のつながりを重視し、現在の生活の充実を優先し、子どもに高い教育達成を期待する度合いが低い、「のんびりした暖かい世界」を形成していたことを明らかにした。

この調査では大人の地域での生活を描いていないという課題が残され、また、現代日本の状況を考える上で有益な地域をあらためて調査対象とする必要がある。3章では、国勢調査データの分析から貧困層が集住する傾向が顕著に見られる地域として公営住宅集積地の存在を確認し、調査対象地域として設定した経過を述べている。

4章でとりあげる北地域は単一種の公営住宅のみで構成された大規模団地であり、団地建設直後には生活施設の実現を目指す住民運動とともに、子育てをめぐる互助、親睦活動が展開されていた。建設初期から大量の転出が確認されたが、団地に残った人々の語りからは、現在の充実とつながりを重視する、文化住宅街で見出されたものと同様の生活スタイルが確認された。高齢化と「福祉住宅」政策により地域活動の新たな担い手が得られないという課題に直面しているが、初期から残るリーダー層による活動が継続されている。

5章で扱う西地域は、地域に所在する児童養護施設を取り込んで多様な地域活動を展開している点がユニークであり、港湾労働者家族、公営住宅住民が多く居住し強い共同性を培っていた点とその背景として重要な要因となっている。住民の地域への評価も高いが、少子・高齢化の深刻化に加えて、現在進行中の高層住宅への建て替えが共同性を低下させること

が危惧される。

6章で描く南地域は、地理的条件から周囲と隔てられた感のあるエリアに戸建て住宅、マンションも加わった住宅の混在地域となっている。ここでも初期段階から活発な地域活動が展開され、新たに来住した人々による活性化の取り組みもみられる。子どもへの教育期待が高いものではないほか、地元への愛着感情が強く持たれ、地域への定着傾向、他出し戻ってくる住民が多いことも特徴である。

3地域に共通する特徴を終章で整理している。活発な住民活動が展開され、特にそのテーマとして「子ども」が強調されている点が見られた。建設当時の子どもが非常に多かった時期には、個々の家族だけで子育てを担うことは困難で近隣の互助ネットワークが不可欠であり、「子どもを探す」など共通のエピソードが語られたように、子どもを無事に育てるという課題を解決するために住民自らが組織的な活動を展開することが不可欠であった。また、「自分達の子ども」、「子どもは地域の宝」といった言葉が住民の間に根付いており、親から「ほったらかし」にされている子どもを見守る取り組みなども含め、子育てを終えた住民達が積極的な活動を担い続けている。活動の「楽しさ」が共通して語られており、課題解決のための共同的な活動が担い手の充実感とつながりを強化するという、自治コミュニティと親交コミュニティが連関して実現していることが読み取れる。

こうした特徴を持つ地域社会で、子ども達はどのような経験を重ねつつ大人になっていくのか。7章では「ヤンチャ」な子達に焦点を当てた。先輩や他地域の子と「つながり」を結び、ツレ（仲間集団）の世界を重視する。困難さが重層する「しんどい」家族だけでなく、家族との関係を十分に結べない子ども達もヤンチャの世界に入りがちである。学校に「気まま」な「楽しい」行動を持ち込む子ども達は教師との間で対立を繰り返し、「頭ごなし」に叱る教師が特に反抗の対象となるが、同時に「理解して欲しい」志向を持つ生徒達とコミュニケーションをとることができる教師は、ヤンチャな子達にとって重要な助言者、支え手となっていることも見出せた。さらに、学校での勉強に重きを置かず、働いている先輩達をモデルとし、地域の大人も含め豊富なネットワークに支えられながら仕事の世界に移っていく若者達の移行過程を、「自然な移り行き」と名づけた。

8章では、ヤンチャな子達や勉強に重きを置かない多数派の子ども達が引き起こす学校での「荒れ」た状況を前にした教師達の取り組みを描いている。「乗り越えられ」、「学校ではない」状況にまで事態が悪化する背景に、教師達があらかじめ抱く地域への否定的な評価が関わっており、教師の「動きの悪さ」が生徒を「ほったらかし」にし、さらなる事態の悪化を招くという悪循環状況にあったことが確認された。事態の改善には明確なリーダーシップをとる教師の存在、子ども・親との信頼を取り戻す地道な動き、さらに部活動を通して生徒を学校につなぎとめ、自信と誇り、責任感を育てる取り組みが奏功したことがあげられる。

以上、各章の知見を整理してきたが、あらためて貧困層と「貧困と隣り合う人々」がともに暮らす地域という観点でポイントを整理しておく。低学力や学校の「荒れ」など、教育を

重視する人々が回避したいと考えがちな地域に留まり定着する、愛着感を抱きさまざまな地域活動の担い手となる住民がおり、「ほったらかし」の子も見守る地域が維持され、大人への移行を促すネットワークも機能している。こうした地域の存在が、地域での貧困・排除問題の顕在化を抑えていることが想定される。

しかし、こうした地域の共同性が維持されるためには、活動の担い手の存在と住民構成の問題が大きく関わっている。「福祉住宅施策が続けば地域は疲弊する」というリーダー層住民の声は切実であり、住宅政策の転換が求められる。また、より安定した移行、大人の生活を実現するために、現実にある地域と生活に即した学校教育からの働きかけも必要である。

今回対象とすることができた公営住宅集積地に共同性が保持されてきた条件を探るために、困難状況がより顕在化した他の地域を比較対象とする必要がある。また、「自然な移り行き」を可能としている若者達が働く仕事の世界が、その後の大人としての生活を支えるものとなっているのかどうかを探ることなど、残された重要課題について今後引き続き検討する必要がある。